

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12455

研究課題名（和文）虚弱高齢者の夜間頻尿と生活の困り事に対する支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a support program for frail elderly with nocturia and associated life problems

研究代表者

竹田 裕子（Takeda, Yuko）

島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師

研究者番号：60598134

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：訪問看護師等が行う、夜間頻尿を含めた下部尿路症状をもつ要支援高齢者に対する支援の方向性には以下のことが示唆された。訪問を重ねる中で理解した要支援高齢者の人となりや踏まえ、下部尿路症状のあることをどう捉えているのか把握する、要支援高齢者の排泄の一連の動作を観察する、要支援高齢者の療養環境や社会活動に目を向け、夜間頻尿などの下部尿路症状で生活への困りごとが出ていないか確認する、他の職種と連携しながら要支援高齢者のニーズに対応すること、要支援高齢者の自尊心に配慮しながら、排泄の自立を支援していくことが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自宅で生活している要支援高齢者に定期的に関わる訪問看護師が、高齢者のもつ夜間頻尿をはじめとする下部尿路症状の困りごとに対して行った看護実践を丁寧に整理した。訪問看護師の行う、要支援高齢者の自尊心に配慮しながら、療養環境の観察や社会活動への影響の有無の判断を行っている実践から、表立った課題として認識されていない要支援者の困りごとに対する支援への手がかりが得られ、在宅看護の場で観察やアセスメントに活用できると考える。

研究成果の概要（英文）：The following points were clarified regarding the support provided by visiting nurses to the elderly requiring support with symptoms of the lower urinary tract including nocturia. To understand the characteristics of the elderly requiring support, and how they perceive lower urinary tract symptoms. To observe a series of excretion movements of elderly people requiring assistance. To observe whether lower urinary tract symptoms such as nocturia interfere with the recuperation environment and social activities of the elderly requiring support. Collaborate with other occupations to meet the needs of elderly people requiring support. It is necessary to support the independence of excretion while considering the self-esteem of the elderly requiring support.

研究分野：看護学

キーワード：要支援高齢者 下部尿路症状 夜間頻尿 訪問看護

### 1. 研究開始当初の背景

地域住民を対象とした下部尿路症状についての全国規模調査において、夜間に1回以上の排尿がある夜間頻尿を有する人は年齢とともに増加し、夜間頻尿は男性のどの年齢層においても日常生活に最も影響を及ぼす症状であり、女性においては腹圧性尿失禁と同等に日常生活に最も影響を及ぼす症状である<sup>1)</sup>ことが報告されている。これらの結果から、高齢者においては、夜間頻尿があることが生活の質(Quality of life; 以下 QOL とする)の低下につながっていることが想像できる。

高齢者は、中途覚醒および早朝覚醒の訴えが若年者に比べ増える<sup>2)</sup>ことも示されており、夜間に起きて排尿に行くことが繰り返されれば、慢性的な不眠症など睡眠の満足感に影響を及ぼすといえる。加えて、次の日の活動への意欲や活動参加そのものへの影響が推察される。そのため、夜間頻尿を有することで高齢者の活動や参加への影響がないかなど、高齢者を生活機能の側面から総合的に捉えていくことが必要であると考えられる。また、高齢者においては、2回以上の夜間頻尿があることで夜間の転倒のリスクが高くなる<sup>3)</sup>ことが示されており、骨折やその先に介護を必要とする状況につながることを考えられる。骨折や介護が必要な状態になることは、高齢者にとって生活を再構築していくことが必要になり、QOL に影響を与えると推察される。本邦においては、近い将来要介護状態に陥る可能性の高いハイリスク高齢者を抽出する方法として、「基本チェックリスト」を介護予防把握事業の一部として作成されており、現在、地域包括支援センターや市町村などの地域の介護予防における相談の場において、看護職をはじめ、保健医療福祉に携わる者によって対象者の状況を評価する方法として用いられている。近い将来要介護状態に陥る可能性の高いハイリスク高齢者は、フレイルな高齢者と考えられ、「基本チェックリスト」はフレイル評価として調査等にも用いられている<sup>4)</sup>。下部尿路症状の中でも尿失禁については、フレイルとの関連を調査され、高齢者において、尿失禁はフレイルのマーカーである<sup>5)</sup>との報告がある。しかしながら、地域で生活する高齢者はいくつかの下部尿路症状をあわせもっており、一つの下部尿路症状のみだけを捉えて高齢者を捉えることは適切でないと考えられる。要支援および要介護1を認定された人の5年後の要介護度の悪化を促進する因子としては、後期高齢者であること、排泄の失敗があることが抽出されていた<sup>6)</sup>。つまり、排泄の失敗は、介護度が軽く認定されている高齢者の介護度の重度化や、比較的自立して生活を送っている高齢者の要介護認定の要因にもなりうる。このことから、下部尿路症状は介護予防を行う上でも重要視すべき高齢者の症状のひとつであると考えられる。ひとは老いることで今までできていた排泄などの身の回りのことが自分の力だけではできにくくなる。そして、一度できにくくなればその「老い」は進行し、元に戻すことは困難を要する。要介護に至る前の要支援にある高齢者に対しては、介護予防ケアマネジメントが作成され、サービス利用者によっては居宅サービスが入る場合もある。そして、居宅サービスの中には介護予防訪問看護などの医療職によるサービスがあり、要支援にある高齢者を支える在宅の医療専門職は、必要な時に必要な環境を整えられるように高齢者の状況を見極めていく必要があるといえる。要支援高齢者が有している夜間頻尿などの下部尿路症状の増悪するプロセスを見逃すことなく、症状の軽いうちから重点的に支援を行っていく必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

訪問看護師等は定期的に訪問を行う中で個別的な関わりを行いつつ、他職種と連携をしていく。本研究においては、要介護状態に至っていない要支援高齢者の下部尿路症状の状況、それに伴う生活への影響について、居宅に向き要支援高齢者に関わっている訪問看護師あるいはセラピストがどのようなところから情報を捉え、支援を行っているのかについて調査し、夜間頻尿を含めた下部尿路症状をもつ要支援高齢者に対する支援プログラムを考案する。

### 3. 研究の方法

国内文献をデータとして、下部尿路症状のある在宅高齢者に対する多職種の連携協働の現状について整理した。そのうえで、要介護状態に至っていない高齢者の下部尿路症状の状況、それに伴う生活への影響について、居宅に向き要支援高齢者に関わっている訪問看護師あるいは理学療法士等のセラピストに対して、半構成的面接を行った。面接時間は対象者1人あたり60分程度とし、プライバシーが保たれる場所で行った。なお、面接内容は対象者の許可を得たうえでICレコーダーに録音した。要支援高齢者を支援する中で高齢者の下部尿路症状の状況について、生活への影響が出ていそうだと、予防的な介入が必要だと感じた事例について語ってもらい、どのような支援を行っていたのかについて明らかにした。面接内容をICレコーダーに録音したものを基に逐語録を作成した。逐語録から、要支援1あるいは要支援2にある高齢者のフレイルの状況と下部尿路症状、それに伴う生活への影響について、どのようなところから情報を捉え、どのような支援を行ったのかを表す内容に着目し、意味内容が分かる文脈で抜き出す。それらのデータを繰り返し読み、そのデータの表す意味を解釈し、できるだけ対象者の言葉を用いながら、簡潔な表現にまとめた。相違性や類似性について比較検討し、共通する意味をもつもの同士を分類し、その集まりがもつ意味の特性を表すのにふさわしい名前をつけた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 文献研究

排泄に課題のある在宅高齢者に対するケアや多職種連携での支援としては、【療養者の個別性を踏まえた排泄のアセスメント】がされ、【専門的な介入が必要な事例に関して病院側と訪問看護師との適切な時期に連携を行う】という報告がみられていた。また、【排泄動作に必要な運動機能の再獲得や環境調整などについてのセラピストによる介入】や、【セラピストの提案した排泄の介助方法について介護職と情報共有を行い統一したケア方法を提供】した報告も見られた。

##### (2) 面接調査

2つの訪問看護事業所を対象施設とし、6名の訪問看護師とセラピストに面接を実施した。研究参加者の年齢では、30歳代が1名、40歳代が1名、50歳代が1名、60歳代が2名であった。訪問看護師等は、下部尿路症状をもつ軽度の要介護状況にある高齢者に対する高齢者の下部尿路症状につながる<疾患に付随する多様な症状や筋力の低下による排泄動作を観察する>ことを行っていた。特に、夜間頻尿のある虚弱高齢者に対しては、「トイレのドアをいつも開けっぱなしに。トイレ行くとときに押し車で行くから、なんかこうトイレのドアを開けるのが不具合だから、もう開けっ放しにしてすっと入れるように」と、トイレのドアを開けたままにしておくことで排泄の失敗につながりにくいことを捉えていた。さらに、セラピストにおいては、歩行する際の姿勢に着目し、療養場所からトイレまでの距離を考えて、安全にトイレまで歩行できる力をつけるようなメニューを検討していた。また、排泄はデリケートな話題であるため、訪問看護師はマッサージなどの高齢者が気持ちいいと感じるケアを行うことや、外出や夜間の休息についての話題が出てきた際などの、<タイミングを見計らい排泄状況や対処について聞く>配慮をしていた。要支援状態にある高齢者は身体的にも精神的にも自立しているため、高齢者なりに対処していることを否定しないように、排泄状況やそれに対する対処に耳を傾けることをしていた。訪問看護師は、下部尿路症状と切り離せないと考える排便ケアの際の下腹部と陰部の観察、排泄物の量と性状について<必要な理由を説明し自分の目で確認する>ことをしていた。加えて、訪問看護師は、使用後の尿取りパッドやおむつといった排泄ケア用品がトイレなどにあふれていないか、汚染した下着類などが洗濯できずに脱衣所や療養場所に残っていないかなど要支援高齢者の<生活環境に目を向け療養生活が脅かされていないか判断する>ことをしていた。夜間頻尿のある要支援高齢者に対しては、「睡眠のことを気にしておられるかなと思いますよね。夜中何回も起きてトイレに行くと言われたら、じゃあ寝れているのって聞いて」と休息に支障が出ていないかを判断するための生活の様子を丁寧に聞いていた。訪問看護師は、下部尿路症状があることで外出を楽しめないなどの困りごとがあるのではないかと推測し、<高齢者の人となりを踏まえ活動に支障をきたしていないかアセスメントする>ことをしていた。また、これまでの訪問や他の職種と要支援高齢者とのやり取りの中から見えてきた、高齢者自身の<価値観を踏まえ下部尿路症状に対するニーズを見極める>ことをしていた。夜間頻尿と尿失禁がある要支援高齢者に対して、「(高齢者自身が)自分で考えられるのを待つというか。考えられる人だから。こないだ買ってきて、あれ(尿漏れ)があったからちょっと使ってみたわって言われたら、ああ、そうですか、みたいな感じで答えて... (中略)...この人はもう自分で決める人っていう理解かな」とその人の下部尿路症状があることに対する思いや考えについて理解し、看護師に何を求めているのかを見極めることをしていた。そして、排泄方法について一緒に決めることや、排泄の失敗が増えてくるにつれて、思い通りにいかない高齢者の思いに耳を傾けるといった<高齢者の思いや考えに寄り添う>対応をしていた。

##### (3) 夜間頻尿を含めた下部尿路症状をもつ要支援高齢者に対する支援

訪問看護師等が行う、夜間頻尿を含めた下部尿路症状をもつ要支援高齢者に対する支援の方向性としては、訪問を重ねる中で理解した要支援高齢者の人となりを踏まえ、下部尿路症状のあることをどう捉えているのか把握すること、要支援高齢者の排泄の一連の動作を観察することや療養環境や高齢者の社会活動に目を向けることで、夜間頻尿などの下部尿路症状で生活への困りごとが出ていないか他の職種とも連携しながら判断していくことが必要である。

##### <引用文献>

- 1) Honma Y, Yamaguchi O, et al: Epidemiologic survey of lower urinary tract symptoms in Japan, *Urology*, 68(3), 560-564, 2006.
- 2) Kim K, Uchiyama M, et al: An epidemiological study of insomnia among the Japanese general population, *Sleep*, 23(1), 41-47, 2000.
- 3) Stewart R.B., Moore M.T., et al: Nocturia a risk factor for falls in the elderly, *J. Am. Geriatr. Soc.*, 40, 1217-1220, 1992.
- 4) 遠又靖丈, 寶澤篤, 他: 1年間の要介護認定発生に対する基本チェックリストの予測妥当性の検証 大崎コホート2006研究, *日本公衆衛生雑誌*, 58(1), 3-13, 2011.
- 5) Berardelli M, De Rango F, et al.: Urinary incontinence in the elderly and in the oldest Old: correlation with frailty and mortality, *Rejuvenation Res*, 16, 206-211, 2013.
- 6) 和泉京子, 阿曾洋子, 他: 「軽度要介護認定」高齢者の5年後の要介護度の推移の状況とその要因. *老年社会科学*, 33(4), 538-554, 2012.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹田裕子, 小野光美, 原祥子
2. 発表標題 在宅での排泄ケアにおける多職種連携に関する文献研究
3. 学会等名 第27回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹田裕子, 小野光美, 原祥子, 伊藤久美子
2. 発表標題 下部尿路症状をもつ軽度の要介護状況にある高齢者に対する訪問看護師の対応
3. 学会等名 日本老年看護学会第28回学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 光美  (Ono Mitsumi)  (20364052)	大分大学・医学部・准教授    (17501)	
研究分担者	原 祥子  (Hara Sachiko)  (90290494)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授    (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------